広島大学教育学部紀要　第一部（心理学）　第44号　1995

外国人留学生における日本語婉曲表現の理解

松見法男・森　敏昭

(1995年9月11日受理)

Understanding of euphemistic expressions in Japanese in foreign students.

Norio Matsumi and Toshiaki Mori

The study reported here was designed to investigate how foreigners understand euphemistic expressions in Japanese which is a second language for them. In experiment, twenty students from foreign countries were adopted in order to make it clear what kinds of factors affect on the degree of understanding of euphemistic expressions. Four types of euphemistic expressions which mean an invitation, a request, a refusal, or a sarcasm were used in the form of dialogs. The results showed that the euphemistic expression of invitation was easy for them to understand, but the sarcastic expression was difficult. Furthermore, it was also suggested that two factors were critical for the degree of understanding of Japanese euphemistic expressions: (a) how long they have been learning Japanese with no relation to the place of learning, and (b) whether they had experiences in receiving such euphemistic expressions from the Japanese.

Key words：Japanese, euphemistic expression, foreign students, second language.

日本語は，世界の言語の中でも婉曲表現が多い言語である。本来日本語には，相手のことになるべく言及しないで意味を伝えようとする表現法が発達している（外山，1973)。特に婉曲表現には，日本人特有の考え方が反映されているように思われる。それは，日常生活において相手に物事を依頼したり要求したりするときは，できるだけ直接的な表現を避け，間接的に表現して意図を伝えようとする考え方である。したがって，日本語を第2言語（外国語）として学習する第2言語学習者にとっては，このような日本語の婉曲表現を，場面や状況に応じて適切に理解することが必要であり，そのことによって日本語を第1言語（母語）とする学習者とも親密な相互交流が可能となろう。

婉曲表現の理解は，第2言語学習という観点に立つならば，語句や文の理解に際して，語彙的・統語論的な処理だけでなく，意味的さらには語用論的な処理を必要とする。ここでの語用論的な処理とは，以下の例文で説明できるように，発話された表現の意味だけを処理するのではなく，さらに発話された文脈をも考慮し，発話者の意図や発話中の指示対象を特定する処理のことである(Green，1989)。たとえば，“財布を持ってくるのを忘れてね。”という発話表現は，意味的に処理されるならば，“私（聞き手にとっては，この人）は財布を持ってくるのを忘れた。”となる。しかし，この表現は，単に“財布を持ってくるのを忘れた”ことを伝えるよりも，むしろ，“(お金の入った)財布を持って来なかったので，お金を貸して欲しい”という依頼の表現であったり，“財布を家まで取りに帰っていたので，約束の時刻に間に合わなかった”という言い訳の表現であったりする。したがって，婉曲表現の理解に際しては，語用論的な処理を行ってはじめて，発話者の意図を十分に受けとめることができるといえる。

そこで本研究は，このような日本語の婉曲表現を，日本語を第2言語として学習している者がどの程度理解できるのか，またその理解に影響を及ぼす要因は何であるのかを明らかにすることを目的とする。実験では，日本語を第2言語として学習している外国人留学生を対象とし，日本語の対話文における婉曲表現の理

解について，彼らが有する日本語の学習経験という観点から検討する。

方　　法

被験者　国立のH大学，K大学，N大学のいずれかに留学している外国人留学生20名（年齢：22歳～38歳）であった。このうちの13名が男性で，7名が女性であった。国籍別では，インドネシアが4名，フィリピンが3名，中国が3名，台湾が2名，そしてインド，韓国，シンガポール，タイ，ネパール，パキスタン，バングラデシュ，フランスがそれぞれ1名であった。

材料　8つの対話文を用いた(Appendix を参照のこと)。これらの対話文は，(a)口語によるもの，(b)社会的地位による上下関係をほとんど考慮しなくてもよい友人どうしの間で聞かれるもの，(c)聞き手が日本文化に対する深い知識を有していなくても，語句や文の意味そのものは容易に理解できるもの，という基準を満たすものであった。また，対話文の中で用いられる婉曲表現としては，聞き手がその婉曲表現を理解して次の行動を起こすことにより，話し手が何らかの形で心理的・物理的に利益を得る4つの表現，すなわち“誘い”“依頼”“断り”“皮肉”の4つの表現を取り上げた。これらの表現が入った対話文20個(それぞれの婉曲表現について5個ずつ）を，日本人大学生5名に提示して，どのような種類の婉曲表現であるかを回答させる予備調査を行った。そして，5名中4名以上が一致して回答した，対話文8個（それぞれの婉曲表現について2個ずつ）を選択した。対話文は，ルビが付された常用漢字，およびひらがな，カタカナで表記され，1つずつ1枚のカード（B6横版）に印刷された。

手続き　実験は，被験者が在籍する大学の留学生会館で個別に行われた．具体的な手続きは，以下のとおりであった。まず，被験者の有する日本語の学習環境を明らかにするために，面接による予備調査を行った。主な質問項目は，(a)母語の種類，(b)日本語の学習歴，(c)日本での滞在期間，(d)大学での専攻領域などであった。面接では，必要に応じて日本語の他に，英語とフランス語が用いられた。次に，本実験に入った。8つの対話文を順番に提示し，婉曲的に表現されている発話文に対する回答を，日本語で，口頭と筆記によって求めた。すなわち，“これから，2人（A君とB君）の間で行われた日本語での対話を見せます。あなたがB君（さん）であるならば，括弧で空白になっている部分に，日本語でどのように答えるかを考えて下さい。そして，あなたがB君になったつもりで，実際に声を出して話し，それを括弧の中に日本語で書いて下さい。ただし，漢字がわからなければ，ひらがなやカタカナ，あるいはローマ字でも結構です。”と教示した。8つの対話文の提示順序は，被験者間でカウンターバランスされた。8つの対話文すべての提示が終わった後に，それぞれの対話文における回答の理由，とりわけ発話者であるAの意図について尋ね，あわせて婉曲表現を聞いたり話したりした被験者自身の経験についても質問した。なお，本実験の教示と対話文提示後の質問は，被験者に合わせて2つの言語で，すなわち日本語と英語，または日本語とフランス語で行われた。被験者の口頭反応はすべてテープレコーダーで記録された。

結　　果

調査用紙に記述された回答と，それぞれの回答に対する理由に基づいて，婉曲表現を理解していると判断された場合には1点を，理解していないと判断された場合には0点を与えた(満点は8点)。得点化は，実験者2名によって行われたが，一致しない回答については協議して決定した（2名の一致率は92.8%であった)。ただし，インドネシアの国籍をもつ32歳の男性（日本語の学習期間と日本での滞在期間はいずれも6か月）は，婉曲表現が入った日本語の対話文をほとんど理解していなかったと判断されたので，分析の対象から除外した。したがって，分析の対象者は最終的に19名であった。19名の被験者については，日本語の学習期間が1年未満の者を初級，1年以上3年未満の者を中級，3年以上の者を上級と便宜的に分類した。また，日本での滞在期間に関しては，1年未満の者を短期，1年以上3年未満の者を中期，3年以上の者を長期と便宜的に分類した。

各被験者についてのS－P表(佐藤，1987)をTable 1に示す。日本語の学習期間ならびに日本での滞在期間を同時に示したこの表からは，次のことが明らかとなった。それは，(a)日本語の婉曲表現についての理解の程度は，日本語の学習期間と関係があり，日本での滞在期間とはあまり関係がないということ，そして(b)日本語の婉曲表現では“誘い”が理解されやすく，“皮肉”が理解されにくい，ということである。

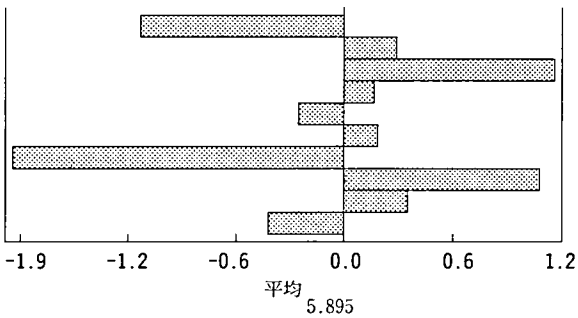
次に，上述の(a)を統計的に明らかにするために，数量化理論Ⅰ類による分析を行った。Fig. 1に偏相関係数ならびにカテゴリー別のスコアを示す。この分析では，日本語の学習期間と日本での滞在期間の他に，被験者自身が聞き手となる場面で，話し手から婉曲表現を用いて発話された経験があるかないか，さらに，大学での専攻分野が理系か文系かというカテゴリーも用いた。その結果，日本語の婉曲表現の理解には，日本

Table 1　外国人留学生における日本語婉曲表現の理解度に関するＳ－Ｐ表

S	級	期	P No	婉曲表現－左から理解が易しい順－ 断り1	誘い2	誘い1	依頼2	皮肉1	依頼1	断り2	皮肉2	得点
外国人留学生－日本語習熟度の高い順－	◎	◎	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	◎	○	2	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	◎	△	3	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	◎	△	4	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	○	○	5	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	○	○	6	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	◎	○	7	1	1	1	1	1	1	1	0	7
	○	○	8	1	1	1	1	1	1	0	1	7
	○	○	9	1	1	1	1	1	1	0	1	7
	○	△	10	1	1	1	1	1	1	0	1	7
	○	○	11	1	1	1	1	1	1	0	0	6
	△	△	12	1	1	1	1	1	0	1	0	6
	△	△	13	1	1	1	1	0	1	0	0	5
	△	△	14	1	1	1	1	1	0	0	0	5
	△	△	15	1	1	0	1	0	0	1	0	4
	○	○	16	1	1	1	0	1	0	0	0	4
	△	△	17	1	1	0	0	0	0	1	0	3
	△	△	18	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	△	△	19	0	0	0	0	0	1	0	0	1
正答数				18	18	15	15	14	13	10	9	

(注) 級は学習期間（△：初級，○：中級，◎：上級）を，期は滞在期間(△：短期，○：中期，◎：長期)を表す。

	偏相関係数	カテゴリー	スコア
1.	0.485093	1 初級	-1.1400
		2 中級	0.2944
		3 上級	1.1838
2.	0.188236	1 短期	0.1775
		2 中期	-0.2487
		3 長期	0.2144
3.	0.715869	1 無し	-1.8999
		2 有り	1.1083
4.	0.287156	1 理系	0.3611
		2 文系	-0.4012



(注) 1. 学習期間　2. 滞在期間
3. 婉曲表現の経験　4. 専攻領域

Fig. 1. 数量化理論Ⅰ類による分析結果

語の学習期間だけでなく，婉曲表現が使用された経験の有無が大きく寄与することがわかった。

考　　察

日本語を第2言語として学習している者が，日本語の婉曲表現をどの程度理解できるか，そしてその理解の程度はどのような要因に影響されるのかを，外国人留学生を対象にして明らかにすることが本研究の目的であった。

本研究の結果は，婉曲表現の理解の程度に影響を及ぼす要因として，日本語が第1言語として使用される言語環境での滞在期間よりも，日本語の学習期間が重要であることを示唆している。これは，第2言語の学習期間が長くなるにつれて第2言語の習熟度が高くなり，第2言語にかかわる言語技能も発達する，という研究結果（Burstall, 1975）と一致する。したがって，婉曲表現という，日本語に多くみられる特別な表現法による語句や文であっても，その理解には，直接的な表現法による語句や文の理解と同じような処理過程が存在することが推測されよう。

日本での滞在期間が長くても婉曲表現を適切に理解できない学習者がみられる反面，婉曲表現を聞き手として経験している学習者は，学習期間や滞在期間が相対的に短くても，婉曲表現をある程度理解していた。このことは，第2言語教育としての日本語教育に有益な知見を提供する。すなわち，基礎的な文法と語彙を学習させた後は，換言すれば初級段階から中級段階へ学習過程が進んだ後は，教室での教授場面においても，可能な限り婉曲表現を含んだ対話ならびに会話を経験させることが重要であり，これによって，学習者の婉曲表現に対する理解が促進されると思われる。

最後に，本研究では，聴覚提示されるべき対話文を視覚提示した点が方法論上の問題点として指摘されうる。日本語は，他の言語に比べて，話し言葉と書き言葉の形態上の相違が大きい(外山，1992)。また，書き言葉では，語用論的な解釈の手がかりとなる，文の抑揚やリズム，音の強弱などがほとんど得られない。今後は，日本語の母語話者が実際に対話した文を聴覚提示する方法で，同様の問題を検討する必要があろう。

引用文献

Burstall, C. 1975 Factors affecting foreign language learning: A consideration of some relevant research findings. *Language Teaching and Linguistics Abstracts,* 8, 5-125.

Green, G. M. 1989 *Pragmatics and natural language understanding*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

佐藤隆博　1987　教育情報工学のすすめ　日本電気文化センター

外山滋比古　1973　日本語の論理　中公叢書

外山滋比古　1992　英語の発想・日本語の発想　日本放送出版協会

付記　本研究は，中條和光（元広島大学教育学部，現福井大学教育学部附属教育実践研究指導センター）との共同研究の一部を，著者が加筆・修正してまとめたものである。

Appendix

婉曲表現を含んだ8つの対話文

【誘い1】

(場面) お昼に，A君の家で。

A：今，何時かなあ。

B：もうすぐ12時だよ。

A：そうかあ。ねえ，お腹がすいていない。

B：（　　）

【依頼1】

(場面) 夕方，大学からの帰り道。

A：明日の講演会にどうしても出席できないんだ。

B：じゃ，ぼく1人で行くことになるね。何か用事ができたの。

A：うん。でも，プログラムだけは欲しいなあ。

B：（　　）

【断り1】

(場面) 夜，電話で。

A：用件は何だい。

B：明日，引っ越しなんだけど，手伝って欲しいんだ。

A：そうしたいけど，今，腰が痛くてねえ。

B：（　　）

【皮肉1】
(場面) お昼に，大学の食堂で。
A：昨日頼んだ本を持って来てくれたかい。
B：ごめん，家に置いてきたよ。
A：またかい。君は本当に物覚えがいいねえ。
B：（　　）

【誘い2】
(場面) お昼に，ゼミが終わった後で。
A：今夜，何か予定がある。
B：いや，特にないけど。
A：実は，君の好きなクラシック音楽のコンサート券が2枚あるんだけど。
B：（　　）

【依頼2】
(場面) 朝，講義が始まる前の教室で。
A：文学史のレポートをそろそろ書かないといけないね。
B：今週の金曜日までだよ。
A：君，何か役に立ちそうな本を持っていない。
B：（　　）

【断り2】
(場面) 夜，B君の部屋で。
A：今度のテニス大会，ぼくのパートナーは誰になった。
B：ぼくとだよ。
A：えっ，君と。この前も，君といっしょで，負けてしまったからなあ。
B：（　　）

【皮肉2】
(場面) 午後，大学の図書館で。
A：君，フランス語をしっかり勉強しているかい。
B：うん。毎日，君から借りたあのテープで勉強しているよ。
A：おかしいなあ。君は，1度フランスで暮らした方が良いかもしれないね。
B：（　　）